

令和 4 年 4 月 14 日

(※受付番号 )

教 育 長 様

代表者 校 園 名 : 大阪市立池島小学校

校 園 長 名 : 小山勝一

電 話 : 06-6571-4354

事務職員名 : 松尾隆子

申請者 校 園 名 : 大阪市立池島小学校

職 名 ・ 名 前 : 主務教諭 倉持依理佳

電 話 : 06-6571-4354

研究コース
A グループ研究A
校 園 コード (代表者校 園 の市費コード)
571190

## 令和4年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	新規研究 (1年目)
2	研究テーマ	「活用する力」をつける 説明文読解の授業 - ルーブリックを取り入れた授業実践を通して -			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を端的に記載してください。</p> <p>本校には、読解力・言語力に課題を抱える児童が多くいる。全校で取り組んでいる「読書タイム」でも、量の多い文章に抵抗感があるため絵の多い本や漫画ばかり読んでいたり、語彙が少ないために学習面や生活面で自分の考えや思いをうまく表現できなかったりする。</p> <p>大阪市教育振興基本計画の「基本的な方向4」に述べられているように、読解力の育成には、主語・述語や文脈を追いついて文意を理解する力を体系的に養うことが必要である。また、児童の基礎学力の定着及び活用力を育成するために、国語科において、多読・速読など言語活動の充実から児童の語彙の増加を進める必要がある。実用的な文章を「正しく読む」指導を通して、文理融合的な内容を含む「総合的読解力」の育成につながるといえる。これらの資質・能力の育成を通じて、児童が正しく読み解き、自分の考えや思いを相手に正しく伝えられる表現方法を理解し、自身の「伝える力」へと活用できる転移する学力を身に付けられるような指導を目指す。</p>			
4	研究内容	<p>継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。</p> <p>昨年は、『「読む力」をもとに「伝える力」を育てる -説明文の学習を通して-』のテーマのもと、(1)国語科における資質・能力の整理(2)主体的・対話的で深い学びの実現をめざした授業改善(3)言語環境の整備、という3つの視点で研究を推進した。中でも、(2)では、ユニバーサルデザインの考え方に基いた指導方法の工夫を取り入れ、「だれもが参加しやすい授業」について研究した。単元によっては特別支援学級で学習している児童も、本研究では共に学習するというインクルーシブな視点をもった実践を体験できるように、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善に努めた。</p> <p>昨年までの研究の成果を生かしつつ、今年度からは、「何のために学習していくのか」を児童一人一人が理解し、学習への興味・関心や意欲を維持し続けられるような授業作りを進める。児童には、単元の導入時に自らの学びの到達目標という学習の見通しをもてるようにする(ルーブリックの提示)。到達目標の明確化や仲間との共有により、児童は説明文の内容理解にとどまらず、文章の情報の適切な把握、情報の吟味、内容の批評といった「活用する」力につながる資質・能力が育つと考えられる。</p> <p>そこで今年度は、『「活用する」力をつける 説明文読解の指導 -ルーブリックを取り入れた授業実践を通して-』を研究テーマとし、新たに「ルーブリックの設定」と「パフォーマンス評価」を取り入れた授業の実践的研究を推進する。ルーブリックを活用することで、児童を「おおむね満足できる」状況へ到達させるための授業展開や、「努力を要する」状況の児童への手立てを考えることができ、指導者の授業改善へつながる。また、学習の導入時にルーブリックを示すことで、児童が、その単元の学習を通して「何ができるようになるのか」を具体的に理解し、見通しを持って学習に取り組むことができると考えられる。さらに、パフォーマンス評価を取り入れることで、単元末におけるペーパーテストなど「できる/できない」と言った二極化された評価(学習の評価)ではなく、児童の「活用・応用・統合する」力を評価(学習のための評価)していく。</p> <p>さらに追及すべき研究内容としては、児童が自らの学びをモニタリングし、自己修正、自己調整していく評価(学習としての評価)まで評価の質を高め、児童と教員が対話し共有する「真正の学びへ」と高めたい。</p>			

研究コース

A グループ研究A

代表校校園コード

571190

代表校園

大阪市立池島小学校

校園長名

小山勝一

5	活動計画	<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <p>4月 和歌山信愛大学教授 小林康宏先生と研究の方向性と研究計画の相談 研究テーマ・目的・内容・見込まれる成果等の検討</p> <p>5月 児童への事前アンケート作成・実施・分析 研修プログラム作成</p> <p>6月 ルーブリックの作成、パフォーマンス評価の校内研修会の実施 公開授業に向けた授業者の決定・指導案作成のための資料収集・指導案素案作成</p> <p>8月 オンライン等による研究大会参加 対面型研修会への参加（参加後、内容の周知及び研究内容に活用） 教材の研修（授業での児童の反応、問題解決の方向性の検討）</p> <p>9月 第1回授業研究会</p> <p>10月 第2回授業研究会 第3回授業研究会</p> <p>11月 ルーブリックの修正、パフォーマンス評価の研修会 第4回授業研究会 指導講評講師との打ち合わせ</p> <p>12月 第5回授業研究会</p> <p>1月 研究発表会（参加者アンケート）</p> <p>2月 筑波大学付属小学校研究発表への参加 教員・児童への事後アンケート実施・事前アンケートとの比較・分析・結果の考察</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p>国語科の教材文の読み取り、図書活動の充実等により語彙数の増加を図り、言語力の基礎的な素養を高める。</p> <p>《検証方法》</p> <p>学力経年調査の各教科における「基礎」に関する領域の平均正答率を、4・5・6年生において経年的に比較し、前年度より4ポイント上昇させる。（令和3年度各教科「基礎」領域の平均正答率3年65.9 4年63.2 5年64.3）</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p>国語科説明的文章を教材として、ルーブリックを活用する授業に取り組むことによって、他教科等においても見通しをもって学ぶ力とともに児童の活用する力を伸ばす。</p> <p>《検証方法》</p> <p>学力経年調査の各教科における「活用」に関する領域の平均正答率を、4・5・6年生において経年的に比較し、前年度より4ポイント上昇させる。（令和3年度各教科「活用」領域の平均正答率3年37.7 4年58.5 5年45.5）</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <p>ルーブリック、パフォーマンス評価に関する研究を深め、国語科の教材研究を深めた授業を行うことにより、児童が国語の見方・考え方を働かせながら思考しようとする態度を育成する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>校内調査の「授業は工夫されていてわかりやすい」と回答する児童の割合を85%以上にする。</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	【見込まれる成果4】			
		《検証方法》			
7	研究成果の共有方法	【見込まれる成果5】			
		《検証方法》			
7	研究成果の共有方法	◆研究発表【必須】 <u>報告書提出日（令和5年2月24日）までに必ず行ってください。</u>			
		○研究発表の日程・場所（予定）			
		日程	令和 5 年 1 月 27 日	場所	池島小学校
7	研究成果の共有方法	◆代表校園HPでの共有【必須】			
		他の共有方法を計画している場合は記載してください。			
8	代表校園長のコメント	<p>昨年度の研究では、国語科の見方・考え方を働かせ、「説明的な文章」の文章構成を理解し、筆者の主張を捉え、児童自身が文章に表すという実践に取り組んだ。先進的に研究されている大学の先生方のお力をお借りし、教員自身が教材を深く読み取り、「目の前の子ども達に思うような文章を書かせるにはどうすればよいのだろうか?」「そのためにどの教材文で、どんな力を付けなければならないのだろうか。」という視点で授業を展開した。</p> <p>まだ十分に研究が深まったとはいえず、今年度からは、教員が教えるという授業スタイルから離れ、子どもと共に教材文を読み取り、筆者の主張に迫るといった授業を理想としている。教師主導型の授業から、教師と子どもが共に教材のみに挑み、学びの深さへといざなうような授業作りを進めたいと考えている。そのためには、教材研究のプロセスを子どもと共に共有するという視点での授業作りが必要である。そのように考えたとき、子どもがその教材を通してどのような力をつけることができるのかという見通しを持たせるべきと考える。そういった観点から、ルーブリックを作成し、学びの見通しを持たせるという研究、パフォーマンス評価による学びの評価を進めるという本研究は、真正の学びへとつながる意義のある研究と考える。</p>			